

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第十六回

著者 中川由香

イザベラ・バードは英国の旅行家で、明治二十七年から三年間、朝鮮の奥地を旅しました。知識欲旺盛で行動力ある女性です。紀行文「朝鮮紀行」は率直で生き生きとした視点で風俗や情景を描く一方、当時の複雑な政治情勢、国際状況も明らかにしています。

圭介は明治二十二年十一月から清国駐在特命全権公使として清国在勤。二十六年七月に朝鮮駐劄公使を兼ね、甲午農民戦争に揺れる朝鮮に赴任。二十七年十月まで朝鮮に滞在しました。バードの旅行と時期が重なっており、バードの記録により圭介滞在時期のリアルタイムな朝鮮に触れる事ができます。

「私がソウルを訪れた当時、日本公使は大鳥氏で、ソウルの小さな社交界によく姿を見せていた。他愛もない話をしていた初老の公使には、その後数カ月後に見せた荒々しい気迫は全くなかった」「大鳥氏は英語がうまく、洋服姿が実に板についており、白い三角ひげが自慢だった。取るに足りないところが唯一の特徴だった」とバードは圭介の印象を語ります。

朝鮮は疲弊しきり、農民の内乱で情勢は悪化を極めます。清の属国だった朝鮮は清に援軍を要請。明治二十七年七月、日本は朝鮮の独立を妨げる清国軍の撤退を要求します。七月二十三日、圭介らは王宮に入り、無力だった国王を幽閉。清からの独立を志向する王の父、大院君を

擁立しました。日清戦争開戦に向かう状況で「大鳥氏は一変した。それまでの彼が仮面をかぶっていたのか、彼は精神的かつ有能で、非人道的な行動家としての面を見せた。きわどい駆け引きで袁世凱の裏をかいたばかりか、他の誰をも出し抜いた」とバードは驚きながら記します。袁世凱は清の公使で、その老練さに列強の国々が一目置く重鎮でした。

圭介ら日本側は、朝鮮が自立する為の改革に着手していました。これは困難極まりない事でした。朝鮮社会は盗む側と盗まれる側に分かれ、公正な規範はなく、官僚は搾取と着服で腐敗し、職位は売買されていました。街は不潔で、民衆は貧しく、女性の権利はなく、平等な教育の機会もありませんでした。

圭介らが手掛けた改革は数分野に渡り、国の近代化に欠かせない項目ばかりでした。「土木工事と国土の測量を扱う土木局、年毎の人口調査と土地の登記を行う版籍局、衛生局、会計局など、地方行政計画の極めて野心的な部分を為しており、称賛に値する青写真。実行されていれば、朝鮮の宿痼たる多くの悪弊が根絶されたはずである」とバードは記しています。

改革により貴族と平民の区別は書類上は廃止。奴隷制度や任官の差別は無くなりました。残忍な拷問は禁止。重くかさばる旧銭から使いやすい貨幣制度に変わりました。改善された教

育制度の開始。訓練を受けた軍隊と警察の創設。首都への鉄道敷設が進められ、郵便制度が効率良く機能し始めます。国家財政は健全な状態に立て直され、地租を物税から土地評価額に従って金納する方式へ。官僚による搾取が大幅に減り、多岐にわたる費用削減が都市や地方府の大半で実施されました。「真摯に着手されながらも、朝鮮人の性質である無気力や官職にある人の改革反対のせいで、次第に立ち消えてしまった改革もある。それでも改革された体制は断片的であるとはいえ、旧体制を大いに改善した」改革は強引と言われますが、バードはそう評価しました。

また圭介は、国王に議会を創設することを進言しました。議会の決議案は、国王の裁可を得て法令となり、部外者にも書面による提案を求めました。議会は十月まで招集されました。決議案は官報に掲載され流布されました。圭介は、官報を鮮明な活版印刷で発行する有益な刷新を行いました。知識人しか読めない漢字と、無知な者の文字とされていたハンゲルとの混合体が官報に掲載され、一般庶民にも読めるものとなりました。官報は朝鮮の法としての力を持ち国会制定法を流布する、重要なものでした。

日清戦争の圭介は、その開戦の糸口となった事でのみ有名です。しかし圭介は、朝鮮の社会状態の改善を願い、日本政府との板挟みの中、真摯に改革に取り組んでいました。日清戦争の歴史評価には様々な見方があり、圭介の評価も政治事情に影響されたでしょう。しかしこうした第三者的な外国人による記録に、圭介の再発見、再評価の糸口は多いと思われれます。